

# 「仏陀の沈黙」が語るもの

四津谷 孝 道

## 序

「釈迦牟尼」(Śākya-muni)というものは「シャーキャ族出身の聖者」即ち「釈尊」、「ゴータマ・ブッダ」(Gotama Buddha)のことであるが、<sup>1)</sup> この表現の中の「牟尼」(muni)という語には、「沈黙の修行を行うもの」という意味がある。<sup>2)</sup> これはあくまで通俗的解釈であるが、<sup>3)</sup> 仏教に限らずインドの諸宗教一般の特徴の一つとして「寂靜」を尊ぶことが挙げられよう。たとえば、仏教における最高の目的である「涅槃」(nibbāna, nirvāṇa)は、周知のように煩惱の炎が吹き消された状態のことであり、法印の一つである「涅槃寂滅」或いは「涅槃寂靜」(śāntaṃ nirvāṇam)という表現にも見られるように、「寂靜」は仏教において最も重要な事項の一つである。そして、この「寂靜」と相通じる「沈黙」は様々な意味を持ち、いろいろなコンテキストで文献に現れてくる。それは肯定的な意味合いを有する場合もあれば、否定的な意味合いを有する場合もあり、その何れでもない場合もある。また、その「沈黙」は「仏陀」のものであったり、「仏弟子」或いは遊行者 (paribbajāka) — 一般には「普行沙門」と訳される<sup>4)</sup> — や仏陀或いは仏弟子の対論者であるバラモン等のものであったりもする。就中「仏陀の沈黙」に関しては、今日に至るまで数多くの研究者によって考察がなされてきた。というのも、この「仏陀の沈黙」というテーマが、「仏陀の言葉」、嚴

1) 『仏教語大辞典』上巻, p.610.

2) Wayman [1981], p.389; 三枝 [1978], pp.61-62.

3) Mayrhofer [1963], vol.2, pp.654-655, Verzückter, Begeisterter, Weiser, Seher, Asket, Einsiedler (bes. einer, der das Gelubde des Schweigens auf sich genommen hat) / enthusiast, sage, seer, ascetic, hermit (esp. one who has taken the vow of silence); Böhlingk [1976], Band V, p.90, "ein Begeisterter, Verzückter; sputer ein ausgezeichnete Weiser, Seher, Asket überh. insbes. ein solcher, der das Gelubde des Schweigens getan hat.; Monier [1982] p.823, "RV.;AV.; Br.; a saint, sage, seer, ascetic, monk, devotee, hermit (esp. one who has taken the vow of silence". (下線筆者)

4) "paribbajāka"については石上 [1972] 参照.

(24) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

密に云えば「仏陀によって説かれたとされること」を理解する上で、非常に重要な役割を果たすと考えられるからであろう。<sup>5)</sup>しかし、それらの研究の多くはニカーヤ (Nikāya) 文献におけるこの「仏陀の沈黙」に関する第一次資料を網羅的に扱っておらず、更にそれらの中には「仏陀の沈黙」に関する極めて限られた典拠のみに基づく理解が示されているものが決して少なくない。また、このテーマに関する第一次資料を網羅的に扱っているものでも、過去の研究が十分顧慮されていない場合が非常に多いのである。

本稿では、そのような研究状況を踏まえ、主にニカーヤ文献等における「仏陀の沈黙」に関する出来るだけ多くの第一資料を視野に入れ、諸研究を参考にしながら、まず多くの様相を呈する「仏陀の沈黙」を類型化する。次に「仏陀の沈黙」に関する諸事項の中でも最も特徴的と思われる「無記」に焦点を当て、それに関する従来までの解釈を今一度検証してみたい。

## I

「仏陀の沈黙」に言及している仏陀の思想、或いは仏教思想に関する概説書は決して少なくない。そして、それらの中には「仏陀の沈黙」を主題として取り上げた研究（著書並びに研究論文）がある。それらの研究においては「仏陀の沈黙」、更には仏教文献全般（第二次資料も含む）の中に散見できる「沈黙」並びにその解釈を列挙し、或いはそれらを体系的に分類しようという試みがなされている。ここでは、まずそれらの研究の中から興味深いと思われるものをいくつか選び出し、そこにおいてどのような報告並びに検討がなされているかを紹介してみたい。

Hermann Beckhは、著書 *Buddha und seine Lehre* (Beckh [1958]) において「仏陀の沈黙」を体系的に分類はしていないが、それには以下のような局面

5) このことを端的に表す意味で最もよく引用されるのが、以下のBeckhの文章である。Es würde immer noch einseitig sein, bei der Wirkung Buddhas auf seine Zeitgenossen nur die Macht seines Wortes ins Auge zu fassen. Man kennt Buddha nicht, solange man ihn nur nach dem beurteilt, was er geredet hat. Sondern zu der Macht der Rede gestellt sich bei ihm eine andere, die jene beinahe noch überragt, die Macht des fassen, ist für das ganze Verständnis des Buddhismus von größter Wichtigkeit. Zu den allervortrefflichsten Eigenschaften, die im Sinne Buddhas ein Mensch haben oder sich aneignen kann, gehört das Schweigen, und der Buddha selbst ist Meister in dieser Kunst gewesen. (Beckh [1958], p.110).

があることを指摘している。

1 仏陀が愛好した沈黙 (Buddha liebte das Schweigen: p.110, ll.21-26, p.112, ll.11-25)

これは、『長部』経典 (*Dīgha-Nikāya, DN.*) の『ポッタパーダ経』 (*Poṭṭhapāda-sutta*) において、ポッタパーダが自らの弟子達に対して「仏陀は騒音を好まず、静寂を愛好する。」と述べている箇所に基づく解釈である。<sup>6)</sup> また、ここでは沈黙がヨーガ (yoga) との関連からも説明されている。<sup>7)</sup> ヨーガによれば、沈黙を守り通すことによって修行者に内在する力は増してゆくが、沈黙を破って「智」を露にすることによって逆にその力が失われてしまうのである。これが仏陀が沈黙を愛好した理由であると述べられている。<sup>8)</sup>

2 高貴な沈黙 (das vornehme Schweigen: p.110, ll.26-34)

『ウダーナ』 (*Udāna, Ud.*) において仏陀が政治について語り合っている弟子達に対して、「政治について語ることなかれ、さもなくば沈黙を守れ。」と戒めている箇所に基づく解釈である。<sup>9)</sup>

3 承諾 (Zuzage) 或いは肯定 (Bejahung) の意味での沈黙 (p.110, l.35-p.111, l.7)

これに関しては、仏陀が遊女アンバパーリー (Ambapāli) による供宴の申し出を沈黙をもって承諾したのであるが、それにもかかわらずその仏陀を強引に自らが催す食事招こうとするリッチャヴィ (Licchavi) 人の申し出を、仏陀が拒否した *DN.* の『大般涅槃経』 (*Mahāparinibbāna-suttanta, MP*) の一節が指示されている。<sup>10)</sup>

4 仏陀の教えと他学派との相違に関する沈黙 (p.111, ll.8-12)

Beckhによれば、サーンキヤ (*Sāṃkhya*) 学派やヨーガ (*Yoga*) 学派等と自らが意

6) *DN.* vol.I, p.179. (尚、以下の資料において、頁数が記されていないものは頁数の記載がないか、或いは当該箇所の類推が出来なかったことを示す。“\*”は、典拠を確認出来なかったことを意味する。議論が過度に複雑になっている場合は、第一次資料及び第二次資料の何れに関しても本題に直接関わると思われるもののみが記載されている。)

7) *Hathayogapradīpikā* I, 11.

8) 原 [1985], [1997].

9) *Ud.* p.11

10) *DN.* vol.II, p.95.

## (26) 「仏陀の沈黙」が語るもの (四津谷)

見を異にする多くの事項に関して仏陀は黙して何も語らなかったというのである。但し、仏陀がその相違点に関して彼等と論争することを回避する為に沈黙を守ったのか否か等、その沈黙の理由は明確に示されていない。

## 5 回答を与えることが実践的 (praktisch) であると思われない場合の沈黙 (p.111, 1.12-p.112, 1.26)

この意味での沈黙は二つの事例を通して説明されている。その一つは「シンサパー樹」(simṣapā) の喩に関する沈黙である。このシンサパー樹の喩は『相応部』(*Samyutta Nikāya, SN.*) の『諦相応』(*Sacca-samyutta*) において述べられており、<sup>11)</sup> その喩の内容は次の通りである。仏陀は自らの手の中にあるシンサパー樹の葉とシンサパー樹の森全体のその葉の数を比較する。前者は仏陀自らが説き示してきたことを、後者は自らが知りながら説き示さなかったことを象徴すると考えられる。そして、仏陀がそれらの多くのことを説かなかった理由としては、「それらが悟りや涅槃に導かないこと」が挙げられている。つまり、「実践的ではない」という理由に基づいて仏陀によって教えが説かれなかったことが、「仏陀の沈黙」の意味として扱われているのである。Beckhはこの解釈の支持者として Oldenberg を挙げている。<sup>12)</sup>

その他に、一般に「梵天勸請」伝説として知られていることも、この「沈黙」の典拠として挙げられている。<sup>13)</sup> 仏陀は成道後、自らが悟った内容が他の人々に理解されないだろうと考え、言い換えれば自らの教えを説くことが徒労に終わってしまうであろうと判断し、法を説くことなく涅槃してしまおうとした。しかし、仏陀の教えなくしては世の中が破滅すると思った梵天の促しによって、仏陀は説法することとなるのである。ここでは、梵天の促しがなければ教えが説かれなかったであろうことが、「仏陀の沈黙」として扱われていると考えられる。<sup>14)</sup>

## 6 超越的 (transzendent, =形而上学的) な問題に関する沈黙 (p.112, 1.27-p.115, 1.8)

これは主に「十 [難] 無記」或いは「十四 [難] 無記」等と云われる事項に関して仏陀によって答えが与えられなかったことに関する「沈黙」である。Beckh はそれらの

11) SN. vol.V, p.437f.

12) Hermann Oldenberg, *Buddha, sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*, 5th. ed., p.240.\*

13) *Mahā-vagga* (*Vinaya*. vol.I, p.4f)

14) 中村 [1992], pp.443-465; 坂本 [1992], pp.474-469.

「無記」に関する諸事項の内容を超経験的なもの、またはいつの時代でも宗教的要求に密接な関係があるものとし、それらに対する沈黙を「積極的教訓の含みのある躊躇」(Zurückhalten mit positiver Belehrung) であると述べている。そして、その典拠としては『中部』経典 (*Majjhima-Nikāya*, MN.) の「毒矢」の喩が述べられていることで有名な『マールンキヤ小経』 (*Cūḷa-Mālunkya-Sutta*) を挙げている。<sup>15)</sup> (尚、この「無記」、そして『マールンキヤ小経』については後に改めて言及する。)

7 ことばでは表現できず (das in Worten nicht mehr auszudrücken [ist])、思考によっても把握できないもの ([das] mit Gedanken nicht mehr zu fassen ist) に対する沈黙 (p.116, 1.4-p.118, 1.29)

Beckhによれば、これは最高のもの (die höchste Dinge) に関する「沈黙」であり、また「ことばでは表現できず、思考によっても把握できないものに対する畏敬 (Ehrfurcht) の沈黙」であると理解されている。

Troy Willson Organは、論文 “The Silence of the Buddha” (Organ [1954]) において、仏陀の様々な沈黙の中、特に無記の質問に対して仏陀が沈黙を守った理由を次のように分類している。

1 仏陀が自らの在世当時、他派の見解を認めていたことに帰因する沈黙 (He accepted the current views: pp.128-129)

ここでは、無記に関連して尋ねられた質問に対して、仏陀は当時のウパニシャッド的な回答以外に彼独自の回答を有していなかったので沈黙を守ったという解釈が紹介されている。尚、Organ 自身はこの解釈は妥当ではないと明確に述べている。<sup>16)</sup>

15) MN. vol.I, p.426ff

16) Organ はこの解釈の典拠として以下の第二次資料を列挙している。E. G. A. Holmes, *The Creed of Buddha*, New York, John Lane Company, 1908, p.x.\*; Ananda K. Coomaraswamy, *Hinduism and Buddhism*, New York, The philosophical Library, 1943, p.45.\*; Keith, *Buddhist Philosophy in India and Ceylon*, 1923, p.94; Radhakrishnan, *Indian Philosophy*, vol. I, London, George Allen and Unwin, Ltd., 1927, p.360f.\*; T. W. Rhys Davids, *Buddhism*, London, Society for promoting Christian Knowledge, 1894, p.83f; Junjirō Takakusu, *The Essentials of Buddhist Philosophy*, Honolulu, University of Hawaii, 1947, p.20.

(28) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

2 仏陀が自らの在世当時、他派の見解を認めなかったことに帰因する沈黙 (He rejected the current views: pp.129-131)

この解釈の典拠として、Organは SN. の『無記相應』(Avyākata-saṃyutta) からの一説を挙げている。<sup>17)</sup> その内容は次のようである。そこでは、まずヴァッチャゴッタ (Vacchagotta) が仏陀に「我は存在するか否か」と問いかける。それに対して仏陀は沈黙を守る。ヴァッチャゴッタが去った後に、アーナンダは何故に沈黙を守ったかを仏陀に尋ねる。仏陀曰く、もし「我が存在する。」と云えば、それは常住論を肯定する事になり、自らが説く無我論に抵触することとなる。一方「我が存在しない。」と云えば、断滅論を肯定する事になり、また「我」の存在を信じているヴァッチャゴッタを安易に迷わせることにもなってしまうというのである。このように、ヴァッチャゴッタが信じる説を仏陀自身が認める訳ではないのであるが、ヴァッチャゴッタが誤解することを危惧して仏陀は敢えて答えを示さなかったというのである。<sup>18)</sup> また、上述の解釈と同じようにこれに対してもOrgan自身はその妥当性に関して否定的な態度を示している。

3 仏陀は自らの見解（或いは主張）を有していなかったことに基づく沈黙 (He had no views of his own: pp.131-134)

Organは、仏陀は不可知論者 (agnostic) であるが故に回答を有しなかったのであるという解釈をここで紹介している。<sup>19)</sup> 更にOrganは、「無記」のような形而上学的な問題に関しては仏陀は自らの見解を有していなかった、或いは無知であったから沈黙を守ったという両解釈については、ニカーヤ文献に典拠を見出すことはできないけれども、そのような解釈が有効であるとすれば、ただ小乗仏教 (Hinayāna Buddhism) においてのみ可能であると述べている。また Organ は、Keith や Radhakrishnan の見解を引用して、<sup>20)</sup> 仏陀程の人物がそのような質問に答えられないはずはなく、そのように「仏陀が不可知論者である。」という理解よりも「仏陀が一切知者である。」<sup>21)</sup> という理解の方が説得力があると結論し、この解釈にも否定的な態度を示している。<sup>22)</sup>

17) SN. vol.IV, p.400f.

18) Organ はこの解釈の典拠として以下の第二次資料を挙げている。Oldenberg: *Buddha*, 1st ed. Engl.tr., p.272f; La Vallée Poussin, L. de, "Agnosticism" (Buddhist) in *Encyclopedia of Religion and Ethics*, New York, Charles Scribner's Sons, 1928, vol. I. pp.220-225.

19) SN. vol.III, p.103.

20) Keith [1923], p.78; Radhakrishnan, "The Teaching of the Buddha by Speech and Silence," *The Hibbert Journal* XXXII, No.3, p.353.\*

21) 一切智者との関係に関しては、宇井 [1965] p.291f参照。

22) Organ はその他の典拠として以下の第二次資料を挙げている。La Vallée Poussin [1928], p.224; E. J. Thomas, *The Life of Buddha as Legend and History*, London, Kegan Paul, Trench, Trübner and Company, 1927, p.202.\*

4 [無記に関連する] 質問に対する答えを有していたが、敢えて語らなかったことに帰因する沈黙 (He would not tell his own views: pp.134-136)

これは直前の「仏陀は不可知論者であったから」或いは「仏陀は質問に答える能力を有していなかった」という解釈とは反対に、仏陀には答える能力はあったが、その回答を理解する能力が質問者に備わっていないので、その回答を質問者自身に見い出させる為に、仏陀は沈黙を守ったとされている。彼はこの状況を「仏陀は秘密の教義 (esoteric doctrine) を有していた。」と述べている。Organ はこの解釈の支持者として Radhakrishnan を挙げ、またその典拠として前に言及した SN. のシンサパー樹の喩に関する仏陀の沈黙や、同じ SN. のヴァッチャゴッタによる「我は存在するか否か」との質問に対して仏陀が沈黙を守った箇所を指示してはいるが、Organ自身はそれが決して説得力のあるものとは考えてはいないようである。<sup>23)</sup>

5 自らの見解を説くことができないことに帰因する沈黙 (He could not tell his own view: pp.136-138)

この「自らの見解を説くことができない」という沈黙の理由には、三つの局面があるとされている。

第一は、「質問そのものが不可解である」ということである。つまり、仏陀に向けられた質問そのものが理解できない意味を含んでおり、そういう場合に仏陀は沈黙を守るか或いはその質問そのものを訂正して誤解のないようにすることが指摘されている。前者の例としては、前にも触れたヴァッチャゴッタによる「我は存在するか否か」との質問に対して仏陀が沈黙を守った箇所が、<sup>24)</sup> 後者に関しては DN. の *Kevaddha-sutta* よりの一節がその例として挙げられている。<sup>25)</sup>

第二は「語られる対象そのものが知識 (= 言語) の域を越えている」ということである。これに関する典拠としては、SN. の「無記相応」に述べられている如来の死後の存在に関するパセナディ王 (Pasenadi) とケーマー尼 (Kemā) との間の対論が取り上げられ、たとえば後述する「無記に関連する事項」の一つである如来の死後の存在に関し

23) Organ はこの解釈の典拠として以下の第二次資料を挙げている。D. T. Suzuki, *Essays in Zen Buddhism*, 1st series, London, Rider and Company, 1927, p.47, note 1; Radhakrishnan [1927], vol. I, p.466.\*; Oldenberg [1882], p.273; E.J. Thomas, *Early Buddhist Scriptures*, London, Kegan Paul, Trench, Trüber and Company, 1935, p.117f.\*

24) SN. vol.IV, p.400f.

25) *Kevaddha-sutta* (DN. vol.I, p.222f).

## (30) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

て、「如来そのものが深遠で推し量ることが出来ないこと」が「仏陀の沈黙」の理由の一つであると述べている。<sup>26)</sup>

第三には、「言語そのものの不完全性 (inadequency)」がその理由とされ、『楞伽経』 *Laṅkāvatāra-sūtra.*, 『維摩経』 *Vimālakīrtinirdeśa-sūtra* 一般に「維摩の一黙」と称されるもの一、<sup>27)</sup> また具体例が示されてはいないが「禪」仏教の考え方等もその典拠とされている。

6 説法の主な目的から逸脱したくなかったことに帰因する沈黙 (*He would not be distracted from his main purpose.:* pp.138-140)

Organ は、この解釈を最も妥当なものを見なしている。彼によれば、この沈黙は仏陀の実用的な (*pragmatic*) 態度に基づくものであり、仏陀が「哲学者」 (*philosopher*) ではなく「宗教者 (師)」 (*religious teacher*) であることが、沈黙の理由とされるのである。典拠としては、MN. の『マールンキヤ小経』, DN. の『清浄経』 (*Pāsādika-suttanta*) 等、<sup>28)</sup> 前に言及したシンサパーの喩等が挙げられている。<sup>29)</sup>

K. N. Jayatilleke は、著書 “*Early Buddhist Theory of Knowledge*” (Jayatilleke [1980]) において、「仏陀の沈黙」を次のように分類している。まず、質問を「答えることができるもの」 (*answerable*) と「答えることができないもの」 (*unanswerable*) に分け、各々を更に二つに分けて下記のような四つの解釈を提示している。

## 1 質問そのものは答え得るものであるけれど、仏陀はその答えを知らなかった。(pp.471-472)

これは「懐疑主義」 (*scepticism*) 或いは「素朴不可知論」 (*naive Agnosticism*) 的な解釈とされている。この解釈の支持者として挙げられているのが、Keith である。<sup>30)</sup>

26) SN. vol. IV, pp.374-380.

27) *Vimālakīrtinirdeśa-sūtra* (P.229a8-b2, 大鹿. p.75, ll.32-36). 尚、『楞伽経』に関しては、典拠が示されていない。

28) DN. vol. III, p.136f.

29) Organはこの解釈の典拠として次の第二次資料を挙げている。Thomas [1935], p.118.

30) Keith [1923], p.44, p.45, p.63. また、Jayatillekeはこの解釈について Jacobi の研究 (Hermann Jacobi, *Sacred Books of East.*, vol.45, p.xxxviii) に関しても言及している。



2 質問そのものは答え得るものであり、仏陀は答えを知っていたけれども、その質問は宗教の中心問題である救済に関係しないので回答を与えなかった。(pp.473-474)

これは「実用主義」(Pragmatism) 的解釈と見なされており、『マールンキヤ小経』、シンサパー樹の喩、その他のニカーヤ文献がこの解釈の典拠とされている。<sup>31)</sup>

3 質問そのものは答え得ないものであり、つまり質問の内容が理性の範囲を越えていた。(pp.474-475)

ここでは、問題の解決が人間の知識(=理性)の域を越えているものであることより、仏陀は沈黙を守ったと理解されており、そしてこれは「理性に関する不可知主義」(Rational Agnosticism) に帰因するものと述べられている。この解釈の支持者としては上記の Beckh と Murti が挙げられている。<sup>32)</sup>

4 質問そのものは答え得ないもの、言い換えれば質問そのものが論理的に無意義なものであった。(pp.475-476)

これは、Jayatilleke自身「論理的な実証主義」(Logical Positivism) に基づく沈黙と理解している。ここでは「存在するか否か」等を尋ねることが、涅槃のような超越的境地に関しては適切ではないとされ、その典拠として SN. や MN. が挙げられている。<sup>33)</sup> また、ここで Jayatillekeが強調しているのは、涅槃に達した人(=如来)の境地は深遠で計りえず表現し得ないが、到達しえないものでは決してないという点において、それは不可知論的解釈と明確に区別されるとする。<sup>34)</sup>

T.R.V.Murtiは著書 *Central Philosophy of Buddhism* (Murti [1980]) において提示した仏陀の沈黙の理由は以下の四つである。

31) DN. vol.I, p.191; MN. vol.I, p.431; SN. vol.V. p.437.

32) Hermann Beckh, *Buddhismus*, Berlin und Leipzig, 1919, vol.I, p.120; Murti, T.R., *The central philosophy of Buddhism*, London, 1955, p.38, p.40.

33) SN. p.1075, p.1076(?); MN. vol.I, p.487.

34) Jayatillekeはこの解釈について Wittgenstein にも言及している。(Ludwig Wittgenstein: *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1933, 7, p.183.)\*

## (32) 「仏陀の沈黙」が語るもの (四津谷)

## 1 実践的な (practical) 理由に基づく沈黙 (p.36, l.14-p.37, l.4)

ここでは、仏陀に向けられた質問は形而上学的な性質を有するものと理解されており、形而上学的な考察は精神修養にとって必要でないものでもあり、且つ害をもたらすものでもある故に、仏陀は沈黙を守ったと見なされている。(metaphysical enquiries are unnecessary and can even prove harmful to spiritual life.) この解釈の典拠としては『マールンキヤ小経』が挙げられている。

## 2 仏陀が不可知論者であることに基づく沈黙 (p.37, ll.4-8)

この解釈の支持者としては Oldenberg や Keith が挙げられている。<sup>35)</sup>

## 3 否定的 (negative) な理由に基づく沈黙 (p.37, ll.8-13)

仏陀は回答を与えないことによって、「我は存在しない。」或いは「涅槃とは絶無のことである。」ということをも主張しようとしたというのであり、その支持者としては第2の解釈の場合と同じように Oldenberg や、更には Thomas が挙げられている。<sup>36)</sup>

## 4 絶対的な真実 (the unconditioned nature) の不可説性 (indescribable nature) に基づく沈黙 (p.47f)

Murti によれば、これこそが「仏陀の沈黙」の正しい解釈なのであり、これはウパニシャドにおいて真実が "neti neti" としか表現され得ないとされたように、仏陀も真実は不可言 (=不可説) であることにより沈黙を守ったということなのである。<sup>37)</sup>

ここまで述べてきた諸研究者の「仏陀の沈黙」に関する解釈及びその分類に比べて、より網羅的で且つ精緻な分析を提示しているのが Klaus von Oethke である。同氏は論文 "Die unbeantworteten Fragen und das Schweigen des Buddha" (「答えられなかった質問と仏陀の沈黙」, Oethke [1994]) の中で、第二次資料に述べられている「仏陀の沈黙」の諸解釈に関して以下のような分類を提示している。

35) Keith [1923], p.45, p.63; Oldenberg, (典拠に関する記載なし)

36) Oldenberg [1881], p.272; Thomas [1971], p.127.

37) 第一次資料としては以下の文献が列挙されている。SN. N, p.369ff; Ud. p.80f; Itivuttaka. p.37, p.61; *Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad* 2.3.6 (= *Śatapatha-Bṛāhmaṇa* 14.5.3) また、第二次資料としては Radhakrishnan の研究を挙げている。Radhakrishnan [1927], vol. I, p.682f. cf. *Gautama the Buddha*, p.59\*

1 仏陀の認識のあり方が、肯定的或いは否定的な答えも許さなかった。(Buddhas Erkenntnisstand ließ eine [begründete] positive oder negative Antwort nicht zu.) (pp.92-93)

これは、仏陀自身が答えを知らなかった(=無知であった)から沈黙を守ったということである。

2 仏陀は実用的な顧慮 (pragmatische Erwägungen) に基づいて、即ち実践的でないことより答えなかった。(pp.93-94)<sup>38)</sup> これに関しては以下のような二つの観点が設定されている。

2-1 仏陀は「無記に関連する事項」(第II節参照)に関する質問に関与すること (Beschäftigung) 即ち答えること (Beantwortung) は救済に無関係 (heilsirrelevant) と見なしていた。<sup>39)</sup>

2-2 仏陀は「無記に関連する事項」に関する質問に関与すること即ち答えることは救済に害をもたらす (schädlich)、或いは不利益である (nachteilig) と見なしていた。その理由としては以下の四つが挙げられている。<sup>40)</sup>

1) 貴重な時間の浪費である。(Vergeudung wichtiger Zeit)

2) 涅槃を得ること (die Erlösungsgewinnung) の妨げとなる (hinderlich) 見解 (Einstellungen) を生じさせることとなる。

3) 肯定的或いは否定的な回答をすること (ein positives oder negatives Beantworten) は、涅槃に至る為の諸条件の獲得を促進すること (die Förderung der Voraussetzungen für Erlösung) に対して不利益な (abträglich) 行為 (Verhaltensweise) をなす機会 (Anlaß) を人々に与えることになりかねない。

38) Gajin Nagao, *The Silence of the Buddha and its Madhyamic Interpretation*: In Studies on Indology and Buddhology presented in honour of Prof. S. Yamaguchi. Kyoto, 1955.

39) この解釈のみを理由とすることに関するもの。Christmas Hunphreys, *The Wisdom of Buddhism*. London-Atlantic Highlands 1987, p.52.\*; Klaus Mylius, *Gautama Buddha, die vier edlen Wahrheiten. Texte des ursprünglichen Buddhismus*, München, 1985.\* また、この解釈と他の解釈を連関させて説明するもの。Erlich Frauwallner, *Geschichte der indischen Philosophie I*, Salzburg, 1953; Karl Jaspers, *Die großen Philosophen*, München, 1957; Jaquín Pérez-Remón, *Self and No-Self in Early Buddhism*, The Hague-Paris-New York, 1980.\*

40) Frauwallner [1953]; Jaspers [1957]; Pérez-Remón [1980]\*; Nathmal Tatia : *The Avyākratas or Indeterminables*. Nalanda, 1960.\*

## (34) 「仏陀の沈黙」が語るもの (四津谷)

4) 肯定的或いは否定的な回答をすることは、涅槃の諸条件を育む (Schaffung der Voraussetzungen für Erlösung) ことを妨げる見解を人々にもたらしかねない。

3 「無記に関連する事項」は、仏陀にとって実質的には認識論的 (epistemologisch)、形而上学的 (metaphysisch)、そしてメタ哲学 (metaphilosophisch) な見解であることによって仏陀は沈黙を守った。(pp.94-95) これに関しては以下のような二つの観点が設定されている。

3-1 「無記に関連する事項」の質問にまつわる諸問題 (die in den Fragen involvierten Probleme) についての正確な認識 (Erkenntnis) を獲得することは、原則的として (prinzipiell) 不可能 (unmöglich) であると仏陀によって見なされた。

「無記に関連する事項」に関して確実な認識を得ることは、通常知識の範囲では不可能であると仏陀が理解していたから沈黙を守ったというものである。この解釈の支持者としては、Beckh や Frauwallner が挙げられている。<sup>41)</sup>

3-2 「無記に関連する事項」の質問は言語によって (sprachlich) 表現不可能 (nicht ausdrücklich)、或いは伝達しえない (nicht mitteilbar) もの (Sachverhalt) を志向している。

この解釈は、勝義 (= 真実) を表現するには言語は不完全なものであることより仏陀は沈黙を守ったということである。<sup>42)</sup>

4 沈黙 (das Schweigen) 或いは回答を与えないこと (das Nichtantworten) はそれ自身真実 (Wahrheit) を表現し (zum Ausdruck bringen)、真実を指し示し (hinweisen)、或いは間接的に (repräsentierend) 真実を描写しよう (darstellen) とする仏陀の意図の表れである。(p.96)

この解釈に関しては、「仏陀の沈黙は一つの明確な哲学的態度の表れである。」とする和辻哲郎博士の説を支持する長尾雅人博士の主張や Beckh の説が言及されている。<sup>43)</sup>

41) Beckh [1958], p.114f; Frauwallner [1953], p.228f.

42) Nagao [1955], p.141ff.

43) Nagao [1955], p.143; Watsuji [1937]; Beckh [1958], p.118.

5 肯定的或いは否定的回答は、歴史上の仏陀において (beim historischen Buddha) 彼が至った霊的状态の結果として (infolge seines spirituellen Status) あるのではない諸条件の下で与えられ得る。(p.97)

これは、質問に対する回答がなされるのは肯定的或いは否定的いずれであっても、ある条件の下 - 例えば、煩悩や執着を有しているという条件の下 - でのみ与えられるのであって、煩悩等が滅している仏陀においてはそのような条件は成立しない。従って、仏陀には肯定的或いは否定的な回答のいずれもがありえず、沈黙を守ったという解釈である。44)

6 仏陀によれば、「無記に関連する事項」の質問とそれに対する肯定的或いは否定的回答は、實際上 (sachlich) 妥当ではない主題 (unzutreffende Propositionen) を含意し (implizieren)、或いは前提とする (präsupponieren)。

これは、「無記に関連する事項」の質問やそれに対する回答が、誤ったもの或いは不適切なものを前提としているということである。端的に言えば、これは「無記に関連する事項」の質問の基体が不成立であることと考えられる。この解釈の支持者としては A. K. Warder 等が挙げられている。45)

## II

以下においては、前節で紹介した「仏陀の沈黙」に関する諸の分類並びに「仏陀の沈黙」についての解釈を、一般に「無記」と称されるものに関するものとそうでないものとに分けて検討を加えてゆくことにする。

前述のように「仏陀の沈黙」に関しては様々な局面が有り、更にその各々に関しても様々な解釈がある。中でもとりわけ重要と考えられるものが、一般に「無記」(Skt: avyākṛta, Pāli: avyākata 或いは abyākata) と称されるものに関するそれである。

この「無記」と称されるものには、大きく分けて二つの意味がある。46) 一つは、行為 (=業) やその行為の原因となる心などが「善」、「悪」或いは「無記」と分類される場合のものであり、相反する二つの選言支、つまり「A」とも「~A」とも決定できないことを示すものである。もう一つは、仏陀がある特定の質

44) Pérez-Remón [1980], p.299\*; Collins [1982].\*

45) A. K. Warder, A. K., *Indian Buddhism*, 1970, p.125; Collins [1982].\*

46) CPD. vol I, p.484f.

(36) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

問 — 一般には「形而上学的質問」と云われる — に対して明確な回答を与えなかったことである。仏陀が表明したこの「無記」という態度には、厳密に云えば「唯単に沈黙を守る」とことと「『語らない』と仏陀自身が述べる」ことの二つが含まれるのである。そして、この「回答を与えない」という態度は、以下に示す仏陀の質問への四つの回答方法の一つである。その四つの回答方法（四記答）とは、「一向記」(ekāṃśa-vyākaraṇa, 質問者の言うことが道理に適していると見た時、答える者が躊躇なく、直ちに「然り」とか「否」とか一方に断定して答えること),<sup>47)</sup>「反問」或いは「反詰記」(paripṛicchā-vyākaraṇa, 反問して答えること),<sup>48)</sup>「分別記」(vibhajya-vyākaraṇa, 質問者の説が一部分は正しく、一部分は誤っているとき、区別して返答すること),<sup>49)</sup>そして「止記」,「捨置記」,「置答」或いは「置記」(sthāpaniya-vyākaraṇa, 黙して答えないこと),<sup>50)</sup>と呼ばれるものである。そして、最後の「止記」或いは「捨置記」等と称されるものが本稿で扱うところの「無記」なのである。

その仏陀が答えなかったという質問というのは以下のようなものである。

- 1) ① 世界[我]は常住であるのか。(sassato loko [attā])
- ② 世界[我]は無常であるのか。(asassato loko [attā])
- 2) ③ 世界[我]は有辺であるのか。(antavā loko [attā])
- ④ 世界[我]は無辺であるのか。(anantavā loko [attā])
- 3) ⑤ 霊魂と身体は同一であるのか。(taṃjīvaṃ taṃ sarīram)
- ⑥ 霊魂と身体は別異であるのか。(aññaṃ jīvaṃ aññaṃsarīram)
- 4) ⑦ 如来は死後存続するのか。(hoti tathāgato param marañā)
- ⑧ 如来は死後存続しないのか。(na hoti tathāgato param marañā)
- ⑨ 如来は死後存続し、且つ存続しないのか。(hoti ca na ca hoti tathāgato param marañā)
- ⑩ 如来は死後存続するのでもなく、存続しないでもないのか。(n'eva hoti na na hoti tathāgato param marañā)

47) 『仏教語大辞典』上巻, p.57.

48) 同上, 下巻, p.1113.

49) 同上, 下巻, p.1200.

50) 同上, 上巻, p.606.

【注】1)と2)に関しては、「世界」(loka, =世間)と「我」(attā)が並列して主語となる場合もあるので、主語として「我」も付記しておいた。<sup>51)</sup> また、これらの質問は必ずしも疑問文で表されているばかりでなく、見解の表明 という形式をとって肯定文で表されている場合も少なくない。

これら十個の質問は、一般に「十無記」或いは「十難無記」と呼ばれるものである。(以下においては「十無記」と呼称する。)但し、1)と2)に関して四句分別がなされることより、即ち1)に関しては、「世界は常住であり、且つ無常でもあるか。」「世界は常住でもなく、且つ無常でもないのか。」、2)に関しては「世界は有辺であり、且つ無辺でもあるのか。」「世界は有辺でもなく、且つ無辺でもないのか。」という質問事項が加わることよりその数が十四になる場合があり、それは「十四無記」或いは「十四難無記」(以下においては「十四無記」と呼称する。)と呼ばれる。この「十四無記」は、漢訳文献、部派仏教、そして大乘仏教の文献によく見られる。<sup>52)</sup> (尚、無記の質問の内容並びに数に関してはここでは言及しないことにする。)<sup>53)</sup>

- 1) ① 世間[我]有常
- ② 世間[我]無常
- ③ 世間[我]有常 世間[我]無常
- ④ 世間[我]非有常 世間[我]非無常
- 2) ⑤ 世間[我]有辺
- ⑥ 世間[我]無辺
- ⑦ 世間[我]有辺 世間[我]無辺
- ⑧ 世間[我]非有辺 世間[我]非無辺
- 3) ⑨ 是命是身
- ⑩ 命異身異
- 4) ⑪ 如来終
- ⑫ 如来不終

51) *Pāsādika-suttanta* (DN. vol.III, p.138)

52) 『ミリンダパンハー』*Mip.*においては、「十四無記」の中の③、④が欠けており、「十二無記」になっている。

53) 「無記に関連する事項」の数については、三枝 [1978] 参照。

(38) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

- ⑬ 如来終 如来不終
- ⑭ 如来非終 如来非不終

【注】「十無記」の場合と同様に、1)と2)に関しては、「世界」(loka, = 世間)と「我」(attā)が並列して主語となる場合もあるので、主語として「我」も付記しておいた。

尚、上記の全ての項目が扱われている場合或いはその一部のみが扱われている場合のいずれにおいても、以下においてはそれを「無記に関連する事項」と呼び、それ以外の「仏陀の沈黙」を巡る諸事項を「無記に関連しない事項」と呼ぶこととする。

そして、ニカーヤ文献における上記の「無記」の項目に関する議論の典拠を列挙したものが以下の表である。(一応、対応すると思われる漢訳文献の典拠も付記しておいた。)

#### *Dīgha Nikāya*

- 1) *Mahāli-sutta* (vol. I, p.157f)
- 2) *Jāliya-sutta* (vol. I, p.159f)
- 3) *Poṭṭhapāda-sutta* (vol. I, p.187f)  
漢訳: 『布吒婆樓經』(長阿含17, 大正1巻, 111頁上～)
- 4) *Mahānidāna-suttanta* (vol. II, p.68f)
- 5) *Pasādika-suttanta* (vol. III, p.135f, p.137f)  
漢訳: 『清淨經』(長阿含12, 大正1巻, 75頁下～)

#### *Majjhima Nikāya*

- 1) *Nivāpa-sutta* (vol. I, p.157f)  
漢訳: 『獺師經』(中阿含47, 大正1巻719頁中～)
- 2) *Cūḷa-Māluṅkyā-sutta* (vol. I, p.426f, 430f)  
漢訳: 『箭喻經』(中阿含221, 大正1巻804頁中～)
- 3) *Aggi-Vacchagotta-sutta* (vol. I, p.484f)  
漢訳: 雜阿含34 (大正2巻245頁下～)



*Samyutta Nikāya*

- 1) *Kassapa-samyutta* (vol. II, [16] 12, p.222f)  
漢訳: 雑阿含32 (大正 2 巻226頁上～)
- 2) *Khanda-samyutta* (vol. III, [22] 86, p.116f)
- 3) *Vacchagotta-samyutta* (vol. III, p.258ff)  
漢訳: 雑阿含34 (963) (大正 2 巻, 246頁上～)
- 4) *Ditṭhi-samyutta* (vol. III, p.213ff)  
漢訳: 雑阿含 7 (168) (大正 2 巻45頁中～)
- 5) *Citta-samyutta* (vol. IV, p.286ff)  
漢訳: 雑阿含21 (570) (大正 2 巻151頁上～)
- 6) *Avyākata-samyutta* (vol. IV, pp.374-403)  
漢訳: 雑阿含 5 (106) (大正 2 巻151頁上～)  
雑阿含34 (958) (大正 2 巻244頁中～)  
雑阿含34 (960) (大正 2 巻245頁中～)
  - i Khemātheri (p.375ff)
  - ii Anurādho (p.380, p.384)
  - iii Sāiputta-koṭṭhuka 1 (Pagatam) (p.384f)
  - iv Sāriputta-koṭṭhuka 2 (Samudaya) (p.386f)
  - v Sāriputta-koṭṭhuka 3 (Pema) (p.387f)
  - vi Sāriputta-koṭṭhuka 4 (Ārāma) (p.388ff)
  - vii Moggalāno (Āyatana) (p.391ff)
  - viii Vaccho (Bhandam) (p.395ff)
  - vi Sabhiyo (p.401f)
- 7) *Sacca-samyutta* (vol. V, p.418f, p.448f)  
漢訳: 雑阿含16 (407) (大正 2 巻109頁上～) [=p.448f]  
雑阿含16 (408) (大正 2 巻109頁上～) [=p.418]

*Anguttara Nikāya*

- 1) *Cakka-vagga* 38 (vol. II, p.41 )  
漢訳: 雑阿含26 (大正 2 巻185頁上～)
- 2) *Avyākata-vagga* (vol. IV, p.68f)
- 3) *Nātha-vagga* 20 (vol. V, p.31)

- (40) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）
- 漢訳：増耆阿含42「結禁品46」（2）（大正2巻775頁下～）
- 4) *Upāsaka-vagga* (vol.V, p.196f)
- i (93) p.186f.  
漢訳：雑阿含34（968）（大正2巻248頁中～）  
別訳雑阿含11（202）（大正2巻448頁下～）
- ii (95) p.193f.  
漢訳：雑阿含34（965）（大正2巻247頁下～）
- iii (96) p.196f.  
漢訳：雑阿含34（967）（大正2巻248頁中～）

### III

ここではまず、「無記に関連しない事項」に関して検討を加えてゆくのであるが、その前に以下に示す「仏陀の沈黙」の「無記に関連する事項」並びに「無記に関連しない事項」の解釈全体について、予め次の留意すべきいくつかの点を確認しておきたい。

- 1) 以下の項目は、主に「仏陀の沈黙」の諸解釈なのではあるが、それは仏陀の弟子等の沈黙に関する解釈をも含む場合もある。
- 2) 以下の項目は、原則として「仏陀の沈黙」のある一つの状況に関する解釈ではなく、その様々な状況に関する解釈であるが、仏陀の沈黙の一つの状況の複数の解釈である場合もある。
- 3) 仏陀の沈黙の一つの状況を説明する際に、下記の項目の二つ以上のものが同時に当てはまる場合もある。つまり、ある一つの「沈黙」を以下の理由の内の幾つかを用いて複合的に説明することが可能な場合もある。

尚、丹治昭義博士は著書『沈黙と教説』（丹治 [1988]）の序章で「仏陀の沈黙」に関する研究概観を提示している。この研究は非常に示唆に富む研究であり、以下においては必要に応じてそれに言及していくこととする。

## 【「無記に関連しない事項」の解釈】

### 1 沈黙を愛好したから

これはBeckhによっても示された解釈である。ニカーヤ文献には、仏陀が静寂を好んだり、<sup>54)</sup> 或いは人里を離れた閑寂な場所を好むことが屢々説かれている。<sup>55)</sup> 但し、後者は「沈黙」というより「静寂」と言った方が適切かもしれない。このような意味での「沈黙」は仏陀或いは仏教にのみ限られたものではなく、「禅定」（「瞑想」）を重んずるインドの宗教思想全般に当てはまると考えられる。

### 2 沈黙を尊んだから

これもBeckhによって指摘されたものであり、前述のように彼によって「高貴な沈黙」（*das vornehme Schweigen*）と称された沈黙である。<sup>56)</sup> Beckhによって指摘された典拠の他に、『ダンマパダ』には「高尚な人、良き人（*sappurissa*）に関する沈黙」というものが説かれている。<sup>57)</sup>

### 3 承諾の意を伝えるため

この解釈に関してよく用いられる表現は、“*adhivāsesi bhagavā tuṅhi-bhāvena*”である。また、仏陀が食事に供応される際や説教を懇願される際等に「沈黙」を以て同意する描写は、『大般涅槃経』等枚挙に遑ががない。<sup>58)</sup>

### 4 自説をことばで表現することが難しい、或いは不可能であると考えたから。 （「教えそのもの」の観点から）

この解釈は、自説そのものを表現することができないので仏陀は沈黙を守ったのであるという解釈である。

尚、この解釈以下の三つの解釈（即ち4,5,6の解釈）は、たとえば「シンサパー樹の喩」においてシンサパー樹の森の葉の数に象徴された所の仏陀が説かなかったこと、そしていわゆる「梵天勸請」のコンテクストにおいて仏陀が一時自らの教えを説くことを躊躇し

54) *Poṭṭhapāda-sutta* (DN. vol.I, p.179), *Udunbarika-sinhanāda-suttanta* (DN. vol.III, p.39).

55) *Udunbarika-sinhanāda-suttanta* (DN. vol.III, p.49).

56) *Ud.* p.11.

57) *Dhammapada* 6-83. (DP. p.23).

58) *Mahāparinibbāna-suttanta* (DN. vol.II, p.95), *Kūṭadanta-sutta* (DN. vol.I, p.148), etc.

59) *Mahā-vagga* (Vinaya. vol.I, p.4f).

## (42) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

たことを、<sup>59)</sup>「教えそのもの」、「説法する相手」、「教えを説く仏陀自身」という三つの観点から解釈したものである。

## 5 相手に自説を理解する能力がないと考えたから。（「説法する相手」の観点から）

この解釈は、教えを聞く人が仏陀の教えを十全に理解する能力がないので、仏陀は沈黙を守ったというものである。例えば、「梵天勸請」のコンテキストにおいて、世の中には様々な理解力を有する人がいるから、仏陀が教えを説く努力は必ずしも報われないことはないと言われることがあるが、<sup>60)</sup>この記述は明らかに仏陀が「相手に自説を理解する能力がないと考えたこと」が前提となっていると思われる。

## 6 自説を正確に表現する能力がなかったから。（「教えを説く仏陀自身」の観点から）

これは、仏陀自身に自らの教えを説き示す能力がなかったので沈黙を守ったのであると解釈しうることを示したものである。

## 7 誤解を畏れたから

この解釈の典拠は、前に言及した SN. の *Avyākata-saṃyutta* の “Ānanda” と題される一節に述べられている仏陀とヴァッチャゴッタ、そして仏陀とアーナンダ（阿難, Ānanda）との会話である。<sup>61)</sup>

## 8 無駄な議論を避けたかったから

この解釈は、対論者達の主張が偏見に満ちており、部分的な真理しか伝えていないため彼等との議論を避けるために沈黙を守ったというものであり、Lamotte や中村博士や平川博士によって提示されている。<sup>62)</sup>

## 9 真理が不可知であるから

これは、仏陀が不可知論者であったから仏陀は沈黙を守ったという解釈の可能性を示唆するものである。また、この解釈は懐疑論者サンジャヤの「鰻のような議論」にも見られ

60) *Mahāvagga* (*Vinaya*. vol. I, p.6f).

61) *Avyākata-saṃyutta* (Ānando or Atthatto) (SN.vol.IV, p.400f).

62) Lamotte [1967], p.53, 中村 [1997], pp.177-200, 平川 [1974], p.63.

「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷） (43)

るように、問題に対する判断停止の態度とも相通じるものがある。<sup>63)</sup> この解釈は、前述のように（オルガンの第5番目の解釈）仏陀の一切智者性と抵触するものとも考えられる。また、後述する「無記に関連する事項」に関する箇所、仏陀自身「自らが理解できないから答えないのではない。」と明確に述べている箇所があることより、<sup>64)</sup> この解釈は検討の余地があると考えられる。

#### 10 絶対的なものが神秘的であることを表現するため

この解釈は、Beckh の第7番目の解釈に通じるものであり、また「神秘主義」(Mysticism) 等とも関わる問題であろうと考えられる。<sup>65)</sup> 更に「仏陀の沈黙」とは直接結びつかないかもしれないが、例えば仏教の初期において仏陀の姿が描かれず、その代わりに「法輪」や「仏足跡」等が描かれたことも、この解釈の典拠となりうるであろう。一方、この解釈を「真理(=勝義)はことばでは表現できないことを沈黙でもって示す」という意味に捉えたとすれば、これは4の「仏陀が自説をことばで表現することが難しい、或いは不可能であると考えたから」という解釈と深く関わるとも考えられる。

#### 11 質問そのものが意味をなさないから。

この解釈の典拠は、*Kevaddha-sutta* において仏陀が相手の質問を訂正した上で答えを与えていることである。<sup>66)</sup> そこでは「沈黙」という現象は表されていないが、関連があると思われたので付記しておく。

### IV

次に「無記に関連する事項」の解釈についてであるが、そこにおける仏陀の「明確に語らない」或いは「明確に回答を与えない」という態度 —これは『ポッタパーダ経』において「不決定記」(anekāṅsika, *DN. vol. I, p.191*) と称されるものであると考えられる— には次の三つの意味があると理解できる。

- 1) 「無記に関連する事項に従事しない」
- 2) 「無記に関連する事項は言及できない」
- 3) 「無記に関連する事項を否定する」(つまり、「無記に関連する事項」は否定されるべきもの、即ち否定対象である。)

63) *DN. vol. I, P. 27.*

64) *Upāsaka-vagga (AN. vol. V, p.197).*

65) たとえば、Staal [1975] 等参照。また、平川博士は「仏陀の沈黙」の理由の一つとして、知識の限界を知って、答えをなさなかったことを挙げている。平川 [1974] p. 63.

66) *Kevaddha-sutta (DN. vol. I, p.222f).*

(44) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

### 【「無記に関連する事項」の解釈】

まず「無記に関連する事項に従事しない」という意味での仏陀の「明確に語らない」という態度に関してであるが、その理由或いは目的としては、以下のようなことが挙げられる。

1 仏陀自身に質問そのものや、それに対する回答が生じることがないから。

DN. の *Mahānidāna-suttanta* では心解脱 (*vimutta-citta*) した者には、我々によって「無記に関連した事項」と呼ばれるものが心に生じることは有るが、仏陀にはそれは無いと説かれている。<sup>67)</sup> SN. の *Diṭṭhi-saṃyutta* では、色 (*rūpa*) 等を取る (=色等に執着する) こと等により「世間が常住」等の「無記に関連する事項」が生じるのであって、<sup>68)</sup> 仏陀にはそれらが無いから「無記に関連する事項」が心に生じないと述べられている。また、SN. の *Vacchagotta-saṃyutta* では「無記に関連する事項」が「邪見 (*diṭṭhigata*) と呼ばれ、それらは色等に関して無知であることより生じると述べられている。<sup>69)</sup> また、同じ SN. の *Citta-saṃyutta* では、仏陀ではなく *Isidatta* 長老において「有身見」(*sakkāya-diṭṭhi*) があることにより「無記に関連する事項」が生じると述べられている。<sup>70)</sup> 但し、この「邪見であるから」という理由による「無記に関連する事項」の解釈は、このように「従事すべきではないもの」 (=係わるべきでないもの) ではなく、「否定されるべきもの」(後述) と理解する方が適当と考えられる。

2 仏陀が質問に対する答えを秘密にしておきたかったから。

『ミリンダパンハー』では、この仏陀によって秘密されることが「師の拳」(*ācariyam uṭṭhi*) と表現されている。但し、何の為に秘密にされるべきか、その内容は何かについては当該箇所では言及されていない。<sup>71)</sup>

3 無駄な議論を避けたかったから。

この解釈は、第Ⅲ節で「無記に関連しない事項」の解釈を述べた箇所でも提示してあるのであるが、「無記に関連する事項」のコンテキストでも同じように理解できる。例え

67) *Mahānidāna-suttanta* (DN. vol. II, p.68).

68) *Diṭṭhi-saṃyutta* (SN. vol. III, p.213).

69) *Vacchagotta-saṃyutta* (SN. vol. III, p.258).

70) *Citta-saṃyutta* (SN. vol. IV, p.287ff).

ば、「群盲撫象」の喩が述べられている箇所がその典拠と考えられる。<sup>72)</sup>

#### 4 質問そのものが救済に関係ないから。

これが従来「無記に関連する仏陀の沈黙」の主な理由と理解されてきたものであり、これに関しては以下に説明を加えていくことにする。

これらの解釈の中、第四番目の解釈「自らに向けられたとする質問そのものが救済に関係ないから仏陀は沈黙を守った」、換言すれば「それらは形而上学的或いは哲学的であり救済と直接に関係がある訳ではないから仏陀は沈黙を守った」ということが、多くの研究者によって仏陀の沈黙の主な解釈であるとされてきた。そして、多くの場合その典拠として引用されるのが、ここまで何度も言及してきた『マールンキヤー小経』である。

この経典の主人公の一人であるマールンキヤープッタ (Māluṅkyā-putta) は、ある時次のように思った。「世界は常住か」等の質問に対して仏陀は答えようとはしないのは何故であろうか。もし仏陀がそれらに対する答えを自らに与えてくれるならば、仏陀の下で修行を続けよう。さもなくば、修行を放棄して還俗してしまおうと。その旨を仏陀に伝えたマールンキヤープッタに対して仏陀は、「マールンキヤープッタが言うように、自分の下で修行をするならば質問に答えようと言ったであろうか」と反問する。マールンキヤープッタはそうではないと答える。更に仏陀は、もし人にして「世界は常住か否か」等の質問に答えが得られない限り修行をしないというのであれば、自分はそれに関して説くつもりはないので、その人は修行をすることなく一生を終えるであろうと語る。そこで持ち出されるのが有名な「毒矢の比喩」なのである。その比喩というのは、ある人が毒矢に射られ、もしその人がその矢を射った人物、その毒の成分、そして使われた弓、矢等に関する詳細が明らかになるまでは、その毒矢を抜いてはならないと主張したら、その人は死んでしまうであろうというものである。そこにおいては、その毒矢を射た人物等を詮索することが、上述の無記に関する十の質問を考察し、答えを得ようと努めることに比定されていると理解できる。そして、それ

71) 『ミリンダパンハー』の当該箇所では、「無記に関連する事項」に関する仏陀の沈黙の理由として「回答を与える理由がないから。」(na tthi buddhānaṃ bhagavantānaṃ akāraṇaṃ ahetukaṃ giram udiraṇaṇ ti, *MiP*. p.145) と述べられているのみであり、それ以上の説明は加えられていない。

72) *Ud*, pp.66-69.

(46) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

に対して「無記に関連する事項に従事しない」という意味での「無記」つまり「回答を与えない」という態度をとる理由は次のように述べられている。

それは、これらが〔何等〕利益をもたらさず、修行の基礎とならず、厭離、離欲、滅尽、寂靜、智恵、正覚、涅槃に導かないからである。<sup>73)</sup>

このように、これらの問題に携わることは何等の利益をもたらさず、基礎的な修行ともならず、究極的には「涅槃」という目的の達成の為には役立たないということである。これと同じような議論は『ポッタパーダ経』にもあり、<sup>74)</sup> ここでは「涅槃等という目的の為に役に立たないもの」とは「自らが経験していないもの」—若干解釈を加えれば—それは「自らが知り得ないもの」であると理解できる。そこに述べられている喩の一つとして、次のようなものがある。<sup>75)</sup> 「国中で最も美しい女性を求め、自分は、その人を愛する。」と云ったある者に対して、例えばその女性のカーストや、名前、肌の色等、否その女性自身を知っているかと尋ねられてその者は答えに窮してしまう。そのように「自ら知り得ないもの」に係わることこそが何の意義もないということなのである。確かに、これら両経に表されている沈黙に関しては、従来のように「形而上学的なものに係わってはならないから、仏陀は沈黙を守った」と理解するのが最も妥当と考えられる。

この『無記に関連する事項』に携わることは何等の利益をもたらさず、基礎的な修行ともならず、究極的には『涅槃』という目的の達成の為には役立つものではない」という解釈を最も明確に表明した一人が水野弘元博士である。同博士は著書『原始仏教』（水野 [1996]）において、「形而上学」と「哲学」とを明確に区別することなく、「仏陀は形而上学に係わらない」という理解を示している。同博士は上記の『マールンチャー小経』に言及し、仏陀が回答を与えなかった経緯を次のように説明している。

73) *na h'etam māluṅkyāputta atthasaṃhitam n' ādibrahmacariyikaṃ na nibbidāya na virāgāya na nirodhāya na upasamāya na abhiññāya na saṃbodhayā na nibhānāya saṃvattati.* (MN. vol. I, p.431)

74) *DN.* vo.I, p.188f.

75) *DN.* vol.I, p.193.



釈尊が形而上学的な問題を排斥された理由としては、第一にはこのような形而上学的な問題は、われわれの認識や経験の彼方にあるのであるから、われわれは絶対にこれを解決することができないからである。……（中略）……形而上学を排斥した第二の理由としては、かりに一步譲って、このような形而上学的問題が解決され得たとしても、それはわれわれの不安苦悩の解脱には何等役にも立たないからである。蓋し修行や解脱はすべてわれわれが経験し得る現象界の問題であるのに、形而上学はこの経験世界と無関係であるからである。<sup>76)</sup>

水野博士は、まず形而上学を我々の認識や経験を越えたものを対象とするものと捉え、前掲書の他の箇所でも「常見」(sassata-diṭṭhi) と「断見」(uccheda-diṭṭhi) をその形而上学の具体的な例として挙げている。<sup>77)</sup> 同博士によれば、「永遠の実体を説く主張」が常見であり、「世の中の存在は永遠のものではなくして、断滅して空無に帰するものであるという見解」が断見であり、それらに関するなんらかの答えを見つけることは、絶対に不可能なのである。更に、よしんばそのような問題に関する答えが得られたとしても、それは解脱（或いは涅槃）という目的には全く役立たないのである。これを同博士の言葉を借りて表現すれば、「常見」や「断見」などは真理でもなく、且つ宗教的、道徳的にも何等役に立たないものとして排斥されるべきもの（＝否定されるべきもの）なのである。（ここで誤解されてはならないことは、「排斥すべきもの」（＝否定されるべきもの）は形而上学そのものなのであり、「常見」や「断見」等の形而上学的思惟内容ではないということである。）

水野博士と同じ路線で、「仏陀の沈黙」がプラグマティックな意味を有するものであると捉えたのが中村元博士である。同博士の幾つかの研究の中でこの問題は屢々扱われているが、ここでは特に著書『原始仏教の思想 I』（中村 [1997]）における同博士の見解に言及してみたい。

まず、中村博士は「形而上学的問題」を人間の思惟能力をもってしては解決し得ないものと理解し、<sup>78)</sup> 更に二律背反に陥るような形而上学的な一方的な断定が初期仏教においては diṭṭhi（或いは sandiṭṭhi）と呼ばれ、排斥されていることを指摘し（ここにおいても、「排斥すべきもの」即ち＝否定されるべきもの

76) 水野 [1996], pp.99-100.

77) 同上, p.91.

78) 中村 [1997], p.193.

(48) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

は、形而上学そのものなのであり、「常見」や「断見」等の形而上学的思惟内容が排斥されるというのではなく、形而上学そのものが否定されているのである。)、<sup>79)</sup> そのditṭhiには「哲学的見解」という訳語を与えている。<sup>80)</sup> そして、この「形而上学的問題」に関する仏陀の姿勢について、『マールンキヤ小経』からの一節を引用した後に、同博士は次のように述べている。

だから、ゴータマ・ブッダは形而上学的問題にかんする論議を避けて、人間存在の深奥を見通した〈四種の真理〉の説 — それは実践的性格のものである — を保つべきことを教えているのである。<sup>81)</sup>

更に、中村博士はこの問題に関連して初期仏教の基本的立場の特徴を次のように指摘している。

- 1 無意義な、用のないことがらを論議するな。
- 2 われわれは、はっきりした確実な根拠をもっているものでなければ、やたらに論議してならぬ。

そうして妄想（戯論 prapañca）を捨てることによってはじめてやすらぎ（ニルヴァーナ）に到達しようという。<sup>82)</sup>

この中村博士の見解は、次のように理解できよう。仏陀は「世界は常住であるか否か」などの形而上学的（＝哲学的）質問に答えなかったことより、仏陀はそれらに関する確実な根拠を有しておらず、またそれらの質問に答えることは涅槃に至るという目的にとっては何等役に立たないものなのであり、そこにおいては四諦説（＝四種の真理）に基づく実践的態度が守られるべきなのである。

以上のような「仏陀の沈黙」に関する理解は、この『マールンキヤ小経』或いは『ポッターパーダ経』等が典拠である限りにおいては説得力があるものである。しかし、仏陀は哲学 — 物事の背後にあり、それらを成り立たしめている原理を追求する意味で — には全く携わらなかったのであろうか。或いは、仏陀

79) 同上, p.195, 註 17.

80) 同上, p.196.

81) 同上, p.212.

82) 同上, p.214.

は人間の思惟能力を越えたもの（＝形而上学的なもの）を全く対象とすることはなかったのであろうか。例えば、仏陀によって説いたとされ、ニカーヤ・漢訳阿含文献のいろいろな箇所でも考察されている「我」（アートマン）とは形而上学的存在と考えられるのではないだろうか。もしそうだとすれば、「我」について議論を重ね、それを何らかの形で否定することは形而上学に携わることになるのではないだろうか。<sup>83)</sup> たとえば、何度となく言及してきた SN. の *Avyākata-saṃyutta* では、ヴァッチャゴッタの「我が存在するか否か」の質問に対して仏陀は回答を与えることを避けながらも、その背後に仏陀自ら「我」を認めないという明確な姿勢が伺えるのである。

次に、「無記に関連する事項」における仏陀の「明確に語らない」という態度には、「言及できない」という意味があるとも考えられる。この仏陀の態度の理由或いは目的として、以下のようなものが考えられる。

#### 1 質問の基体が不可測であるから。

この解釈の典拠は、前にも言及した SN. の *Avyākata-saṃyutta* にある “Khemātherī” という一節である。ここでは「無記に関連する事項」の中の「如来」に関する事項が扱われており、そこにおける基体である「如来」自体が把握し難いものであることが、仏陀が沈黙を守って回答を与えなかった理由とされている。<sup>84)</sup> 但し、この「質問の基体が不可測であるから」という理由を「質問の基体が不成立であるから」という意味に発展的に解釈すれば、「無記に関連する事項」は「言及できない」と理解されるだけでなく、後述のように（第V節参照）それらが「否定される」とも理解できる。

#### 2 仏陀は回答を知らなかったから (ajānanena)。

この解釈は、『ミリンダパンハー』に述べられているものである。<sup>85)</sup>

更に、「無記に関連する事項」における仏陀の「明確に語らない」という態度にはもう一つ「無記に関する事項を否定する」という意味があると考えられる。例えば、「無記に関する事項」は「邪見」(diṭṭhigata) 等と見なされたりなどし

83) 袴谷 [1983] p.22.

84) SN. vol.IV, pp.374-380.

85) *MiP.* p.144.

(50) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

て排除されているのである。そして、それらが「否定されるべきもの」であることは、例えば AN. (増支部) の *Cakka-vagga* 『輪品』の一節に「これらの無記に関連する事項は、すべて比丘によって捨て去られるもの」云々と述べられていることの中にも明確にも読み取ることができるのである。<sup>86)</sup> また『梵網経』 *Brahmajāla-sutta* には、周知のよう仏陀及びその弟子達の在世当時に流布していた六十二の異説が列挙されている。仏陀の「明確に語らない」という態度を「無記に関連する事項が否定されるべきものである」とする理解は、「無記に関連する事項」がこの『梵網経』に述べられている六十二種の異説と結びつけて述べられていることから類推することができる。<sup>87)</sup> 何故ならば、『梵網経』ではそれらの見解が一「否定対象」であると明確に述べられている訳ではないが一、少なくとも否定的に扱われていることは否めないからである。<sup>88)</sup>

上山春平博士は『仏教の思想3・空の論理〈中観〉』(上山 [1997])において、仏陀によって「説かれたこと」と「説かれないこと」という項目を設定する。<sup>89)</sup> 前者において説かれた内容は四諦説に基づく「宗教的な実践」であり、<sup>90)</sup> 我々のコンテキストで云うところの「無記に関連する事項」は後者なのである。<sup>91)</sup> 更に、それは『梵網経』に述べられている外教徒の六十二見であると同博士は述べている。<sup>92)</sup> 同博士によれば、そのような「無記に関連する事項」は「哲学的議論」であり「客観的認識」に関するものなのである。そして、そのような「哲学的議論」や「客観的認識」に係わることは、当面の苦しみや迷いから脱却するには何等役に立たないものと理解されているのである。上山博士は「哲学的議論」に係わることなく(=従事することなく)、四諦説に基づく「宗教的な実践」即ち「実践的な認識」の獲得に勤しむべきであると示すことこそが「仏陀の沈黙」の意味(=目的)なのであると捉えているのである。このように同博士は、

86) sabbāni 'ssa tāni nuṇṇāni honti cattāni vantāni muttāni pahināni paṭinissaṭṭhāni (AN. vol. II, p.41) 尚、これと同様な記述が AN. の *Nātha-vagga* (AN. vol. V, p.31) にもある。その他に、この解釈が適用できると思われる箇所としては次のものがある。 *Avyākata-vagga* (AN. vol. IV, p.68f).

87) *Citta-samyutta* (SN. vol. IV, p.286). 尚、『梵網経』の六十二見に関しては、Weller [1933], 宇井 [1965] 参照。

88) これらの六十二種の見解は「浮説」或いは「偏見」と結びつけられている。(宇井 [1965] 参照)

89) 上山 [1977], pp.274-275.

90) 同上, pp.276-277.

91) 同上, p.275.

92) 同上, p.278.

「無記に関連する事項」を『梵網経』の六十二見に結びつけながらも、それを「否定されるべきもの」ではなく、「従事されるべきではないもの」と理解していると考えられる。同博士が典拠として挙げているのが『マールンキヤ小経』であることより、その限りにおいては「無記に関する事項」に対する態度の意味が「従事されるべきではない」という理解は可能である。というより、それが最も妥当な解釈であると考えられる。しかし、そこに述べられている「無記に関連する事項」を『梵網経』の六十二見と結びつけるのであれば、それは「無記に関連する事項」が「否定されるべきもの」であると理解すべきなのではないだろうか。

## V

大乘仏教、特に中観派のチャンドラキールティ（Candrakirti, ca.600-660）の著作の中に、前述の「無記に関連する事項」についての「従事しない（＝係わらない）」、「言及できない」、「否定する」という解釈のうちの、第三の解釈が「無記」の主なものであることが示されている。

ここまでに幾度となく触れてきた「シンサパー樹」の喩や「梵天勧請」として有名な「仏陀の説法の躊躇」を典拠にして、「自ら理解したものが、或いは自ら説こうとするものがことばでは表現できないので沈黙を守った」、即ち「ことばの不完全性に基づく沈黙」こそが、大乘仏教における「沈黙」であると長尾雅人博士は論文「仏陀の沈黙と其中観的意義」（長尾 [1978], 哲学研究 403 号, そして『中観と唯識』に所収。尚、以下においては後者に基づいて頁数を記する）において指摘している。同博士は以前に言及したOrganの解釈に關説して次のように述べている。

然るに若し仏陀に哲学的態度が認められるとすれば、何故に十四難に対して答えなかったかの理由は、オルガンのこの実践的理由と同時に、むしろ彼も(5)の理由としてあげている、「人間のことばの不完全なること」に求めなければならない。<sup>93)</sup>

長尾博士によれば、勝義としてはあらゆる認識、即ちあらゆる論理や分別が成立しないことこそが仏陀の「沈黙」であり、従って仏陀は「勝義」としては何も

93) 長尾 [1978], p.163.

(52) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

説かなかったというのである。そして、同博士はこの「勝義」を「空性」或いは「勝義空性」と置き換えて、それが中観派の「空」思想における「沈黙」となると捉えている。更に、このような仏陀における沈黙と龍樹 (Nāgārjuna, ca.150-250) 或いは中観思想におけるそれとの類似性に関して長尾博士は以下のように述べている。

龍樹の空は、実に仏陀の沈黙の内容を顕露にし、これに肉付けをあたえたというべきである。仏陀の説法にも龍樹の論理にも、等しく一旦の否定を通してのみ現実への再出発がある。その現実が肯定され蘇ることは、また等しく大慈に由来するものにほかならない。<sup>93)</sup>

龍樹の『中論』 (*Mūlamadhyamaka-kārikā*, *MMK.*) 第二十二章（「如来に関する考察」）、第二十五章（「涅槃に関する考察」）並びに第二十七章「形而上学的見解に関する考察」に、「無記に関連する事項」を巡る議論があるが、ここでは第二十二章における議論を取り上げてみたい。<sup>95)</sup>

『中論』の第二十二章の第十二偈から第十四偈までの間には「無記に関連する事項」の中の如来に関する考察とパラレルな議論が見い出される。

『中論』には数多くの註釈書が存在するが、ここではチャンドラキールティの『プラサンナパダー』 (*Prasannapadā*, *PP.*) の該当個所に関する議論を辿ってみることにしよう

ここにおける議論の主題は「如来に関して空・不空・空にして且つ不空・空でもなく且つ不空でもないという四つの判断が成立しない。」ということである。第十二偈が引用された直後に無記の十四の項目が列挙され、<sup>96)</sup>「これら十四無記は、説明（或いは断定）されないから無記の事項 (*avyākṛtavastūni*) と云われる。」 (*tāny etāni caturdaśa vastūny avyākṛtatvād avyākṛtavastūni iti ucyate*)<sup>97)</sup> と述べられている。このように「無記」とは「説明（或いは断定）されないこと」と明示されており、それは即ち「明確な回答が与えられないこと」を意味すると理解される。そこでは基体である如来そのものが成立しないから、一 厳

94) 同上, p.175.

95) 特に第二十五章に関しては以下の箇所を参照。 *PP.* p.537, l.7f.

96) *PP.* p.446, ll.9-14.

97) *PP.* p.446, l.15.

密には自性として成立しないから — それに関する空等の判断も成立しないとされ、同様に如来に関する「無記に関連する事項」も成立しないとされる。<sup>98)</sup> それに対しては石女の子 (vandhyāputra)、即ち存在しえない子供の肌の色が黒い (śyāma) か或いは白い (gaura) かは断定されえないことが例として挙げられている。<sup>99)</sup> そして、この如来に関する議論が順次それ以外の「無記に関連する事項」にも適用されていくのである。<sup>100)</sup> (但し、そこでは「靈魂と身体は同一であるか」と「靈魂と身体は別異であるか」の二つの事項は議論されていない。) 「無記に関連する事項」は「存在しえない」(na sambhavati) とされ、第十四偈の註釈においては「如来が死後存在するか否か」が単なる「構想」(kalpanā) であり、存在しない (na sti) と述べられている。<sup>101)</sup> つまり、ここでは「無記に関連する事項」が単に構想されたものであり「否定されるべきもの」として理解されていると考えられる。

また、チャンドラキールティは『入中論』(*Madhyamakāvatāra, MA.*) の第六章第百二十九偈の第四句<sup>102)</sup> の註釈でも「十四無記」に言及している。<sup>103)</sup>

ここにおける議論の主題は「蘊が我であるか否か」ということである。その議論は以下のものである。ここで前提となる対論者の主張は「蘊こそが我である。」ということである。そのように対論者によって「我」と見なされる「蘊」を、チャンドラキールティは「世間」という語に置き換え ('jig rten gyi sgras phyung po rnam s'dzin na)、「蘊」(=世間) は生滅するものであることより「無常」であり (skye ba dang 'jig pa nyid kyis)、それによって「無記に関連する事項」の中の「世間は無常である」ということが対論者の主張として設定される。同様に、涅槃の後に蘊 (=世間) は存在しないことより、「無記に関連する事項」の中の「世間が有辺である」並びに「如来が死後存在しない」ということも対論者の主張として設定される。しかし、そのように「蘊」が「我」であることを前提とする「世間が有辺である」等の対論者による主張は、チャンドラキールティによって妥当でないものとされる。何故ならば、彼によればそれらは「[仏陀によって] 否定されているから」('jig rten mtha" dang ldan pa la sogs

98) *PP.* p.446, ll.15-17.

99) *PP.* p.446, l.17-p.447, l.1.

100) *PP.* p.447, l.3.

101) *PP.* p.447, l.14.

102) 'jig rten mtha' ldan la sogs med pa'i phyr ro // (*MA.* p.250, l.15)

103) *MA.* p.250, l.15-p.252, l.2.

(54) 「仏陀の沈黙」が語るもの（四津谷）

pa bkag pa'i phyir)(下線筆者)である。ここで「[仏陀によって]否定されているから」(bkag pa)と云われていることは「仏陀によって説かれていないから」、即ち「無記」(lung du ma bstan pa)であることを言い換えたものに他ならないと考えられる。従って、ここにおいても「無記に関連する事項」が「否定されるべきもの」と解釈されていると理解されるのである。

### 結び

以上のように、諸研究を参考にした上で主にニカーヤ文献等における「仏陀の沈黙」を「無記に関連する事項」と「無記に関連しない事項」という観点から考察を加え、両事項それぞれに種々な「沈黙」があることを述べてみた。特に「無記に関連する事項」の中、「仏陀が明確な回答を与えなかったこと」に関しては、従来のものとは異なった解釈が可能であることを指摘した。つまり、その最も典型的な例である『マールンキャー小経』の解釈に見られるように、「仏陀が明確な回答を与えなかったこと」は「その内容が形而上的であるが故に、それには従事すべきでないこと」と従来より理解されてきた。ところが、「無記に関連する事項」の他の関連箇所を検討してみると、「無記に関連する事項は言及できない」、そして「無記に関連する事項は否定されるべきである」と解釈できる箇所があることが明らかになった。特に「無記に関連する事項は否定されるべきである」ということは、「形而上学」或いは「哲学」と取り組む仏陀の姿勢を述べるコンテキストでも確認できるのである。従って、それは仏陀が無記によって「形而上学」或いは「哲学」そのものを否定するのではなく、それらの中の誤った説(邪見, *diṭṭhigata*)を否定したことを示していると考えられる。更に、そのような無記に関する解釈が後代の中観派のチャンドラキールティによっても支持されていることを補足的に述べてみた。

「無記に関連する事項には従事すべきではない」、「無記に関連する事項は言及できない」、そして「無記に関連する事項は否定されるべきである」という三つの解釈のいずれが「仏陀の沈黙」の本質的解釈であるかを、文献に基づいて明確に判断する準備は、現在の筆者には残念ながら出来ていない。但し、「無記に関連する事項」のような重要な事柄に対して仏陀が終始消極的に沈黙を守り続けたとは想像し難く、また「無記に関連する事項」に関する様々な解釈の中にも見られるように、それらの事項に対して仏陀が沈黙を守ったことは必ずしも仏陀自身がそれらについて明確な見解を有していなかったことを意味するものではないと



考えられる。更に「無記に関連する事項」に対して仏陀は積極的に否定的な判断を下している箇所が確認できる。これらのことより、「『無記に関連する事項』は否定されるべきである、即ち「無我論の徹底」という理解が、他の二つの理解に比べてより本質的なのではないだろうか」という仮説を提示することによって稿を終えることとする。

### 《略号表》

- AN: *Aṅguttara Nikāya*. (PTS)  
 DN: *Dīgha Nikāya*. (PTS)  
 DP: *Dhammapa* (PTS)  
 CPD: *Critical Pāli Dictionary*.  
 印仏研: 印度学仏教学研究.  
 LA: *Laṅkāvatāra-sūtra*.  
 MA: *Madhyamakāvatāra*. (La Vallée Poussin [1970b])  
 MMK: *Mūlamādhyamaka-kārikā*. (de Jong [1980])  
 MN: *Majjhima Nikāya*. (PTS)  
 MP: *Mahāparinibbhāna Suttanta*. (PTS)  
 MiP: *Milinda-pañhā* (PTS)  
 MV: *Mahā-vagga*. (PTS)  
 PP: *Prasannapadā Mūlamādhyamika-vṛtti*. (La Vallée Poussin [1970a])  
 PTS: Pāli Text Society.  
 SN: *Saṃyutta Nikāya*. (PTS)  
 大正: 『大正新修大藏経』.  
 Ud: *Udāna*.  
 WSTB: Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde.  
 WZKS: Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie.

### 《引用並びに参考文献》

Beckh, Hermann.

1958: *Buddha und seine Lehre*, Verlag freies Geistesleben, Stuttgart. (first published in 1958)

- (56) 「仏陀の沈黙」が語るもの (四津谷)
- Collins, Steven.  
1982 : *Selfless Persons. Imagery and Thought in Theravāda Buddhism*,  
Cambridge,
- Coomaraswamy, Ananda K.  
1943 : *Hinduism and Buddhism*, New York, The philosophical Library.
- Frauwallner, Erlich.  
1953 : *Geschichte der indischen Philosophie I*, Salzburg, Otto Müller Verlag
- 袴谷 憲昭  
1983 : 「釈尊私観」, 日本仏教学会年報, 第49号, pp.19-46.
- 原 実  
1985 : Yoga-sūtra III-37, 『雲井照善博士古稀記念・仏教と異宗教』, pp.41-56, 平楽寺書店, 京都.
- 1985 : “Tha Losing Tapas”, *India and Beyond-Aspects of Literature, Meaning, Ritual and Thought, Essays in Honour of Frits Staal*,  
Internatitute for Asian Studies, London and New York, Kegan Paul International.
- 平川 彰  
1974 : 『インド仏教史』上巻, 東京, 春秋社.  
1980 : 「原始仏教の定義の問題」, 仏教研究, 創刊号, pp.1-18.
- Holmes, E. G. A.  
1908 : *The Creed of Buddha*, New York, John Lane Company.
- Hunphreys, Christmas.  
1987 : *The Wisdom of Buddhism*. London - Atlantic Highlands.
- 石上 善応  
1972 : 「無記説とパリバージャカ」, 『佐藤博士古希記念 佛教思想論叢』, pp.3-11, 東京, 山喜房佛書林.  
1980 : 「釈尊の対話と經典の対論の形式」, 仏教思想史 3, 〈仏教内部における対論〉,  
pp.1-24, 京都, 平楽寺書店.
- Jacobi, Hermann.  
1895: *Gaina Sūtras, Tr. from Prākṛit by Hermann Jacobi, Sacred Books of East.*, vol.45, Oxford, Ciarendon Press.

Jaspers, Karl.

1957 : *Die großen Philosophen*, München, R.Piper & Co Verlag.

Jayatilleke, K. N.

1980 : *Early Buddhist Theory of Knowledge*, Delhi, Motilal Banarsidass.  
(first published in 1963)

Jennings, J. G.

1974 : *The Vedantic Buddhism of the Buddha*, Delhi, Motilal Banarsidass.

梶山 雄一

1978 : 『宗教体験と言葉』, 南山宗教文化研究所編, 東京, 紀ノ国屋書店. (= 『空の思想  
仏教における言葉と沈黙』, 1983年, 京都, 人文書院)

片山 一良

1997 : 『パーリ仏典〈第1期〉1, 中部(マッジマニカーヤ)根本五十経篇 I』, 東京,  
大蔵出版.

Keith, A. Berriedale.

1923 : *Buddhist Philosophy in India and Ceylon*, Oxford at the Clarendon  
Press.

雲井 昭善

1972 : 「ブッダにおける対話の在り方」, 佛教研究, 第2号, pp.24-38.

La Vallée Poussin, L. de.

1928 : "Agnosticism" (Buddhist) in *Encyclopedia of Religion and Ethics*,  
New York, Charles Scribner's Sons, vol. I. p.225.

1970a : *Mūlamadhyamaka-kārikās de Nāgājuna avec la Prasannapadā Co-  
mmentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, Osnabrück,  
Biblio Verlag.

1970b : *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IX,  
Osnabrück, Biblio Verlag.

Lamotte, Etienne.

1967 : *Histoire du Bouddhisme Indien*, des origines a l'ere śaka, Louvain,  
Institut Orientaliste, Bibliotheque de museon.

Matilal, Bimal Krishna.

1986 : *Perception, An Essay on Classical Indian Theories of Knowledge*,  
Oxford, Clarendon Press.

(58) 「仏陀の沈黙」が語るもの (四津谷)

茨田 通俊

1990 : 仏教興起時代の思想家と形而上学的課題—サンジャヤ, 仏教, ジャイナ教を比較して—, 大谷大学大学院研究紀要, 第9号, pp.23-36.

1993a: 無記説と外教思想, 仏教学セミナー, 第57号, pp.22-34.

1993b: 無記説等に現れる諸課題について, 宗教研究, 66-4, pp. 195-196.

増谷 文雄

1932 : 『佛陀時代』, 宗教学叢書 8, 東京, 春秋社.

Mayrhofer, Manfred.

1963 : *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*, Heidelberg: Carl Winter, Universität-verlag.

Mylius, Klaus.

1985 : *Gautama Buddha, die vier edlen Wahrheiten. Texte des ursprünglichen Buddhismus*, München.

宮元 啓一

1991 : 『仏教誕生』, ちくま新書, 東京, 筑摩書房.

水野 弘元

1996 : 『原始仏教』, サラ叢書 4, 京都, 平楽寺書店.(初版:1958)

Murti, T. R. V.

1980 : *The Central Philosophy of Buddhism*, Unwin Paperbacks, George Allen & Unwin Publishers Ltd, London. (first published in 1955)

長尾 雅人

1978 : 「仏陀の沈黙とその中観的意義」, (『中観と唯識』所収, pp.158-179) 東京, 岩波書店.

中村 元

1992 : 『コータマ・ブッダ I』, 中村元選集[決定版], 第11巻, 東京, 春秋社.

1994 : 『ミリンダ王の問い—インドとギリシャの対決—』全3巻, 東洋文庫 7, 15, 28, 東京, 平凡社.

1997 : 『原始仏教の思想 I, 原始仏教 V』, 中村 元選集 [決定版], 第15巻, 東京, 春秋社.

二瓶 孝次

1998 : 「無我と無記との理論的整合性—原始仏教の哲学的立場—」, 印度哲学仏教学, 第12号, pp. 143-153.

Oethke, von Claus.

1994 : “Die Unbeantworteten Fragen und das Schweigen des Buddha”, WZKS  
Band 38, pp.85-120.

Oldenberg, Hermann.

1959 : *Buddha, sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*, Berlin.(erst veröffentlicht in 1881)

Organ, Troy Willson.

1954 : “The Silence of the Buddha”, *Philosophy East and West*, N.

大鹿 實秋

1980 : *Vimālakīrti-nirdeśa*, Acta Orientalia, Narita.

Panikkar, Raimundo.

1989 : *The Silence of God - The Answer of the Buddha* - (translated from the original text in Italian “EL Silencio del Dios”), Faith meets faith series, Orbis Books, Maryknoll, New York.

Pérez-Rémon, Jaqu'n.

1980 : *Self and No-Self in Early Buddhism*, The Hague - Paris - New York.

Radhakrishnan.

1925 : “The Teaching of the Buddha by Speech and Silence,” *The Hibbert Journal* XXXII, No.3

1927 : *Indian Philosophy*, vol. I, London, George Allen and Unwin, Ltd.,

Rhys Davids, T. W..

1894 : *Buddhism*, London , Society for promoting Christian Knowledge.

三枝 充憲

1978 : 『初期仏教思想の研究』, 東京, 東洋学術研究所.

Staal, J. Fritz

1975 : *Exploring Mysticism*, Penguin Books Ltd., London.

坂本 純子

1992 : 「梵天勧請の原型」, 印仏研, 第41号, 1巻, pp. 474-469.

Stcherbatsky, Theodore.

1927 : *The Conception of Buddhist Nirvana*. Leningrad: Publication Office of Academy of Science of the USSR.

(60) 「仏陀の沈黙」が語るもの (四津谷)

Suzuki, D. T.

1927 : *Essays in Zen Buddhism*, 1st series, London, Rider and Company.

Takakusu, Junjiro.

1947 : *The Essentials of Buddhist Philosophy*, Honolulu, University of Hawaii.

Takeuchi, Yoshinori.

1972 : *Problem der Versenkung im Ur-Buddhismus*, Leiden, Brill.

丹治 昭義

1988 : 『沈黙と教説』中観思想研究 1, 関西大学東西学術研究所研究叢刊 6, 吹田, 関西大学出版部.

Tatia, Nathmal.

1960 : *The Avyākṛtas or Indeterminables*. Nalanda.

Tauscher, Hermut.

1981 : *Candrakīrti: Madhyamakāvatārāḥ und Madhyamakāvatārabhāṣyam (Kapitel VI, Verse 66-226)*. (WSTB, 5), Vienna: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, Universität Wien.

Thomas, J. Edward.

1927 : *The Life of Buddha as Legend and History*, London, Kegan Paul, Trench, Trübner and Company.

1935 : *Early Buddhist Scriptures*, London, Kegan Paul, Trench, Trüber and Company.

1971 : *The History of Buddhist Thought*, Routledge & Kegan Paul Ltd. London.

宇井 伯寿

1965 : 「六十二見論」, 『印度哲学研究』第3所収, pp.203-303. 東京, 岩波書店.

上野 順瑛

「原始仏教に於ける無記説の論理的意義」, 印仏研, pp.307-310.

上山春平 (梶山雄一との共著)

1997 : 『空の論理〈中観〉』, 仏教の思想 3, 角川文庫ソフィア, 東京, 角川書店.

山崎 次彦

1979 : 「阿含經典における『見』について - そのデッサン - 」, 高野山大学仏教学研究室編, 伊藤真城・田中順照両教授頌徳記念, 仏教学論文集, pp. 91-101.

Walleser, Max.

1925 : *Die philosophische Grundlage des alteren Buddhismus*, Carl Winters  
Universitätsbuchhandlung, Heidelberg.

Warder, Anthony Kennedy.

1970 : *Indian Buddhism*, Delhi, Motilal Banarsidass.

Warren, Henry Clarke.

1969 : *Buddhism in Translation*, Harvard Oriental Series, vol. III, Harvard  
University, Cambridge, Mass.

和辻 哲朗

1937 : 『原始仏教の実践哲学』, 東京, 岩波書店.

Wayman, Alex.

1974 : "Two Traditions of India - truth and silence", *Philosophy East and  
West*, XXIV, No.4. pp.389-403.

Weller, Friedlich.

1933 : "Über das *Brāhmajālasūtra*" , *Asia Major*, Bd. IX, pp. 195-332, pp.  
381-440.

1935-36 : "Das tibetische *Brahmajālasūtra*", *Zeitschrift für Indologie und  
Iranistik*, herausgegeben im Auftrage der Deutschen Morgenländische  
Gesellschaft von W. Geiger, Bd. 10, pp.1-61.

Williams, Monier.

1899 : *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford. (first published in 1899)

Wittgenstein, Ludwig:

1922 : *Tractatus Logico-Philosophicus*, London, Routledge & Kegan Paul  
LTD.